

海辺の記憶を

たどる

旅

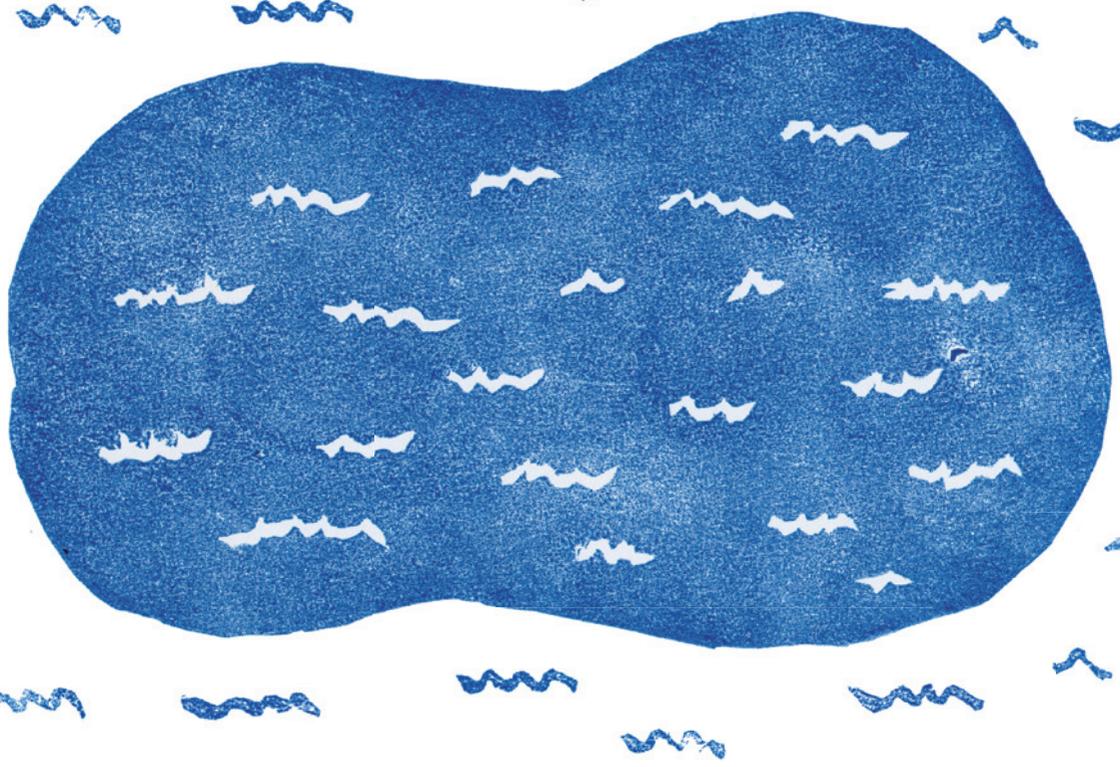
二〇一三—二〇一四

つながる湾プロジェクト

ドキュメントブック

TSUNAGARU WAN PROJECT DOCUMENT BOOK

改新





七ヶ浜 多賀城 塩釜 浜田 松島 東松島

## この湾に、タネは蒔かれた

震災直後、牡蠣漁師である友人の船から見た景色でそのスイッチが入った。

塩釜に生まれ、多賀城に住む僕は、それまで両方の地域をつなげて考えることができなかった。しかし湾に浮かぶ船上から見ると、塩釜も多賀城も、また七ヶ浜、浜田、松島、東松島も、同じ湾の兄弟としてつながっているように見えた。それは、明らかに陸上では感じることでできなかった初めての感覚。

調べてみると、この湾全域が縄文時代からの製塩文化圏であるという。それならなおさら、「湾」で連携すべきだと思った。合併しようというのではない。それぞれの歴史・文化・生き方を尊重しつつ同じ方向を見ることが、これまでと違う新しい力を生むのではないかと。そう考えて行動し始めた時、風変わりな船がこの湾にやってきた。

タネフネに初めて乗ったとき。外海から湾への入り口でエンジンを止め、しばらく甲板に寝そべった。太平洋の波に揺られ浮遊するタネフネが「何にも所属せず、ただそこにある湾」と同化したような気がした。「もしかしたらタネフネは、この地域に大切なものを教えてくれるフネなのではないか」と感じた。

タネフネをきっかけに、湾全域の仲間たちの輪が広がり、彼らとの交流を通して、自分の地域のことを学んだ。知るほどに、「湾」は僕らにとってかけがえないものだと思えるようになった。

気がついたら、タネは小さな花を咲かせていた。その小さな花を多くの方に見ていただきたいと、フォーラムも開催した。次は自分らでその花のタネを蒔いてみようと思う。次の世代が、またタネを蒔きたいと思う花が咲くことを願って。

# つながる湾わん プロジェクト はじまる。

「つながる湾プロジェクト」は、私たちを育ててきた海の文化を再発見し、味わい、共有し、表現することで、地域や人・時間のつながりを「陸の文化」とは違った視点でとらえなおそうと、宮城県塩釜市で始まったプロジェクトです。

2013年5月、TANeFUNeという小さな船が塩釜にやってきました。TANeFUNeは、「海からの視点」を求め、伝える航海をしていました。私たちは彼らとの交流を通し、私たちが暮らす松島湾をもう一度発見し、海辺の記憶をたどる旅を始めました。

私たちが見つけた海辺の記憶を、この本と一緒にたどってみてください。

## CONTENTS.

2	【巻頭文】この湾に、タネは蒔かれた
4	目次・プロジェクト概要
6	【はじまりの話】 TANeFUNeが塩釜へ！
8	活動地域
10	プロジェクト一覧とタイムライン
12	【プロジェクト1】 チームwan 勉強会
16	【プロジェクト2】 湾の記憶をたどる旅
22	【プロジェクト3】 そらあみー松島ー
28	【プロジェクト4】 浦戸食堂 まりこさんのカレーとその記憶
30	【プロジェクト5】 語り継ぎのためのリーディング
34	【プロジェクト6】 同居湾 2013 浦戸諸島
38	「クロストーク」水の記憶をつなぐ
46	あとがき
14	勉強会レポート1 白菜のふるさと浦戸諸島
20	勉強会レポート2 松島湾沿岸の貝塚群と塩づくり
26	勉強会レポート3 霊場・松島と伊達政宗のお月見
36	勉強会レポート4 海からみた日本列島

## TANeFUNe が塩釜へ！



2013年5月26日。浦戸諸島桂島で開催された「塩竈（しおがま）浦戸のリフェスティバル」に、風変わりな小型船が登場しました。その名も「TANeFUNe（たねふね）」。遠く京都の舞鶴市から、「海からの視点」を探求し伝える役割を背負ってやってきたこの船は、この日から約4カ月の間、塩釜や浦戸諸島に滞在し、地元の人々との対話や交流を重ねました。

舞鶴から新潟までの記憶をいっばいに乗せたTANeFUNeは、2013年、松島湾を訪れることになりました。そこで、景勝地松島だけではない湾全域の豊かさをあらためて見直そうとする塩釜の人たちと出会い、松島湾での新たな活動が始まりました。藩政時代には伊達藩の重要港として活躍し、東北の太平洋沿岸部をつなぐ海運の拠点でもあった塩釜港と、日本海側の北前船（※）に代表されるような海の道が、どこかでつながっていたかのようには思えます。

「5月26日に桂島で行われた「塩竈浦戸のリフェスティバル」でのお披露目と浦戸諸島めぐりにはじまり、TANeFUNeは塩釜と浦戸諸島に数ヶ月間滞在しました。一つの港を数日で立ち去らなければならなかった日本海での航海のスタイルとは異なり、ここではある一定期間、TANeFUNeが日常的に在る風景をつくることで、塩釜本土と浦戸諸島をつなぎ、浦戸諸島の島々をつなぎながら、人と人、地域と地域が出会うきっかけをつくりました。



いま私たちが生きている時代を考えてみると、この100年余の間に圧倒的な勢いで流れ込んで来た近代化が過渡期を迎えつつあるように思えます。さまざまな分野で同時多発的に起こった産業化・資本主義化の流れは、私たちの生活のペースを急速に早め、合理的にしました。その過程では、捨てざるを得なかった風習や考え、風景が数多くあったことでしょうか。そうして失われてきた風景や記憶をいま一度見つめ直す視線が、TANeFUNeで伝えてきた「海からの視点」ではないでしょうか。また、利便性や経済性を優先した論理ではなく、水辺にある生活の豊かさや厳しさを受入れ、そこにある自然条件と折り合いをつけていく論理、それこそがTANeFUNeで伝えてきたメッセージだったのではないのでしょうか。様々な知恵と文明を駆使した現代社会を生きている私たちにとって、その視点を持ち続けることは、必ずしも水や海、船のあるところだけではなく、陸や丘の上でも、都会の街中でも有効なものだと言えます。このことを、塩釜でまた新たな仲間たちと共有できたことを幸運に思います。

※北前船：江戸時代から明治時代にかけて活躍した商船で、北陸以北の日本海沿岸諸港から下関を経由して瀬戸内海を通り大坂に至る航路を行き交った。

### 森真理子（一般社団法人torindo代表）

南山大学卒業後、学芸員等を経て、フリーランスで美術・演劇・ダンス・音楽などの企画制作・プロデュースを行う。2009年より京都府舞鶴市でのアートプロジェクト「まいづるRB」ディレクター。2012年より一般社団法人torindoを立ち上げ、日比野克彦監修の「種は船」プロジェクトのほか、遠藤一郎による小中学校支援学級の共同作品展や、ダンス・砂運尾理と老人ホームのお年寄りらによるシリーズ「こつとこ」などを行っている。

### What's "TANeFUNe"??

- 【船質】FRP（繊維強化プラスチック）
- 【大きさ】長さ5.36m、幅2.70m、高さ約3m
- 【重量】0.9t 【機関】船外機（60馬力）【定員】5名
- 【速度】平均7ノット（時速約13km）
- 【形状】朝顔の種を模している

アーティスト・日比野克彦の監修・デザインのもと、2010年から3年をかけて、若狭湾の港町・舞鶴で造船された。日比野氏が2003年から行っていた「明後日朝顔プロジェクト」(※)で育てられた全国を旅する「朝顔の種」が、まさに「人やモノ、地域をつなぐ“船”のようだ」という着想から、「種は船」プロジェクトが誕生。舞鶴からプロジェクトの起点である新潟まで航海をすることを目標に造船を行い、延べ5,000人以上の市民が関わった。

※明後日朝顔プロジェクト…「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2003」において、日比野克彦が新潟県十日町市蒔平の集落約20戸の住民たちと朝顔を育てて交流したことからスタート。蒔平での栽培と種の収穫が続けられるほか、ここで採れた種が水戸、福岡、岐阜と各地に運ばれて栽培の輪が広がり、2013年は25地域が参加。人の記憶を載せた種が地域と地域を繋げ、大きなネットワークとなっている。

### TANeFUNe が巡った地域

2012年、〈TANeFUNe〉は京都・舞鶴から新潟までの約970kmを、35の港に立ち寄りながら81日間をかけて航海。その後、六本木での展示を経て、宮城県を訪れる。TANeFUNeは各港で出会った人たちが描いた絵や、つくったモノ、いただいたモノなどを「宝物」として船に積み込む。同時に、日本列島を「海からの視点」で見直し、水辺にある営みの多様性や豊かさを発信していく。



# 活動地域

SHIOGAMA・TAGAJYO・HIGASHI MATSUSHIMA・  
MATSUSHIMA・SHICHIGAHAMA・RIFU

## A 松島湾 Matsushima wan

宮城県の中ほどに位置する塩釜、多賀城、七ヶ浜、浜田、松島、東松島の各地域に面する湾。湾内には浦戸諸島があり、かつては太平洋への玄関口として栄えていた。海域は水深が浅く、プランクトンが豊富で波が穏やかであるため、海苔や牡蠣の養殖が行われ、種牡蠣は全国に出荷されている。

## B 塩釜 Shiogama city

“塩”作りの神事が残る港町。陸奥国一宮である鹽竈神社の門前町として栄え、松尾芭蕉も訪れたとされる。松島湾に浮かぶ浦戸諸島への定期汽船もここから出航する。「塩竈」とは製塩用のかまどの意で、地名の由来にもなっていることから公文書では「塩竈」を使用することになっているが、実用性から「塩釜」と表記することも認められている。本プロジェクトの活動拠点。

## C 浦戸諸島 Urato syoto

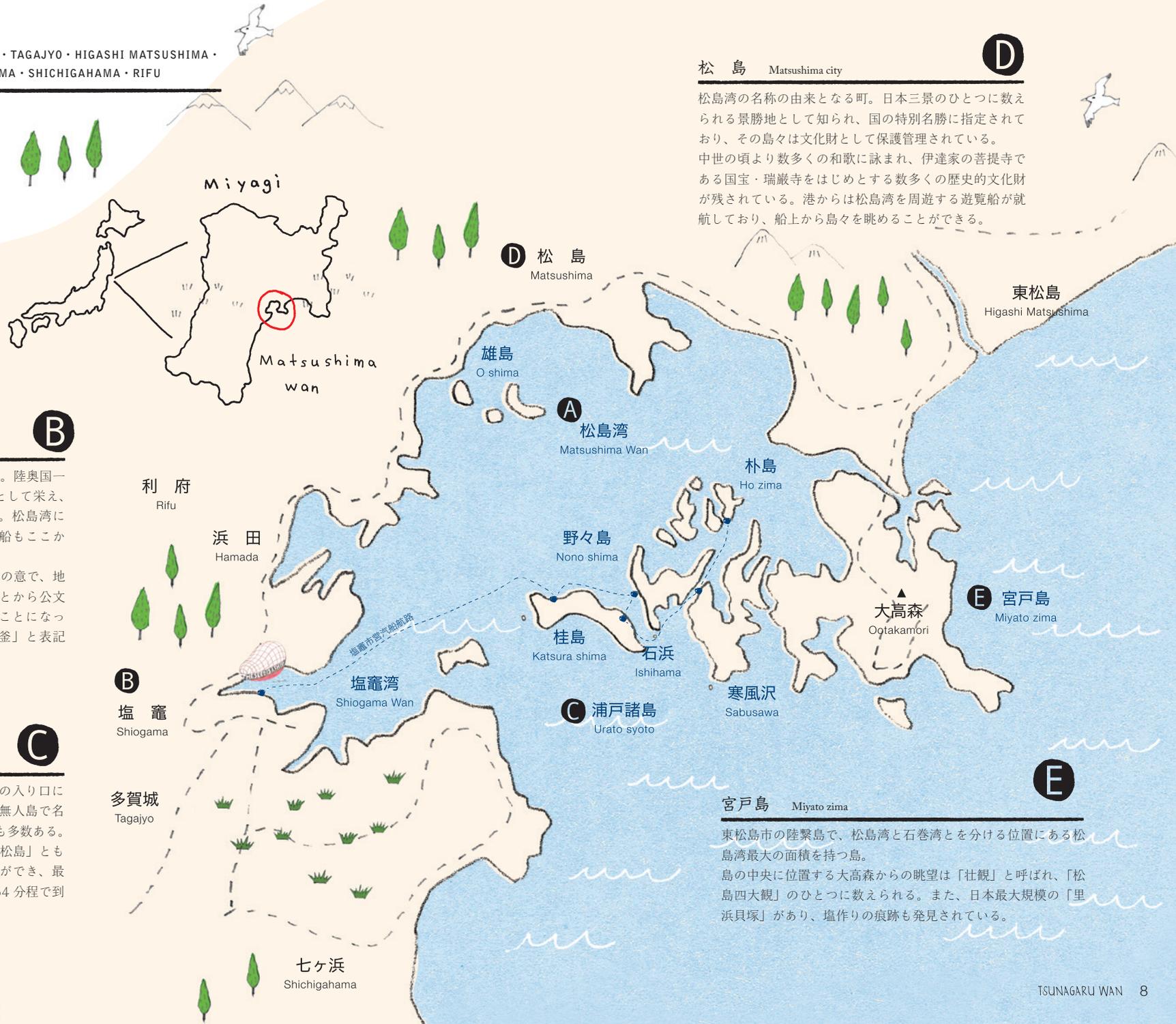
浦戸諸島（うらとしょとう）とは、松島湾の入り口にある島嶼群の名称。四島の有人島のほか、無人島で名前が分かっている島が53、その他無名の島も多数ある。名前は「松島湾（浦）の門戸」の意で、「外松島」とも呼ばれる。塩釜港から市営汽船で渡ることができ、最も近い桂島へは23分、最も遠い朴島へは54分程で到着する。

## D 松島 Matsushima city

松島湾の名称の由来となる町。日本三景のひとつに数えられる景勝地として知られ、国の特別名勝に指定されており、その島々は文化財として保護管理されている。中世の頃より数多くの和歌に詠まれ、伊達家の菩提寺である国宝・瑞巖寺をはじめとする数多くの歴史的文化財が残されている。港からは松島湾を周遊する遊覧船が就航しており、船上から島々を眺めることができる。

## E 宮戸島 Miyato zima

東松島市の陸繋島で、松島湾と石巻湾とを分ける位置にある松島湾最大の面積を持つ島。島の中央に位置する大高森からの眺望は「壮観」と呼ばれ、「松島四大観」のひとつに数えられる。また、日本最大規模の「里浜貝塚」があり、塩作りの痕跡も発見されている。



# プロジェクト一覧とタイムライン

CHRONOLOGICAL TABLE OF TSUNAGARU WAN PROJECT

「つながる湾プロジェクト」では、海辺の記憶を発見するための小さなプロジェクトを複数実施しています。このページでは、2013年のスタート時点からこれまでにいったプロジェクトをまとめました。

2013

TANeFUNe 来訪



「つながる湾プロジェクト」がはじまる 内容 Page 6-7

そらあみ - 浦戸諸島 -

参加者と共に空に向かって漁網を編むことで、人をつなぎ、記憶をつなぎ、完成した網の目を通して土地の風景を捉え直す、アーティスト・五十嵐靖晃によるプロジェクト。

内容 Page 22-25

TANeFUNe カフェ

TANeFUNe が浦戸諸島 4 島 5 地区で移動カフェを開設。美味しい冷茶と共に、浦戸諸島での生活や、他地域の海についてお話ししたり、島の様子をスケッチする場を提供。



チーム wan 勉強会

塩釜・松島湾や海の文化、浦戸諸島などの歴史について、様々な分野の講師を招いて学ぶ勉強会。

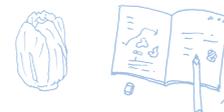
内容 Page 12-13



2014

語り継ぎのためのワークショップ

内容 Page 30-33



そらあみ - 松島 -

内容 Page 22-25



同居湾

TANeFUNe の船長・喜多直人がカメラを通して塩釜・浦戸諸島の「今」を記録していくプロジェクト。

内容 Page 34-35



海辺の記憶をたどる旅展

つながる湾プロジェクトを通して得た湾の財産を一堂に集めた、参加型の企画展。湾の記憶を疑似体験できるだけでなく、ワークショップ、写真やプロジェクトで使った道具の展示、クロストーク等を実施。

内容 Page 18-19



浦戸食堂

各地域の家庭料理の背景にある人々の姿や記憶、固有の文化を見つけ出し、後世へと伝えていくプロジェクト。浦戸諸島で愛された料理を通して、島民達の心の奥に眠っていた記憶を鮮やかに蘇らせた。

内容 Page 28-29



湾の記憶ツーリズム

7000年前から脈々と人が暮らし続ける松島湾。この土地にひそむ「湾の記憶=文化・歴史・風土」をフィールドワークを通して発見してもらう体験型企画。

内容 Page 17





## 知らなかった“湾”を学ぶ

2013年にTANeFUNeが塩釜や浦戸諸島での活動を始めた頃、地元塩釜メンバーは、湾の文化、海の文化、浦戸諸島の文化を学ぶ勉強会を開始しました。

コーディネートは、地域の財産を認識し育てるコミュニティを発足させるべく活動している「一般社団法人チガノウラカゼコミュニティ」。地元の歴史を研究している方や、海苔の生産者、文化の視点から白菜の種採りに取り組む方など多彩なゲストを招き、不定期で開催しています。



もっと地元のことを知りたい！

その思いから、チームwan勉強会に参加しました。この湾には、何も知らなくともその場に行くだけで感じられる美しさ、心地よさがあります。しかしながら、史跡や街並みなど、湾の歴史や文化を知ることによってより輝きを増す魅力もあります。また、この地域を訪れたことのない方々に魅力を説明するには知識が必要です。

勉強会を通して私たちは、浦戸諸島やこの湾を囲む地域には海や湾によってもたらされた多くの歴史や文化があることに気付かされました。今までならガイドに載っているスポットを巡り、その景色や史跡をただ眺めることしかできなかったかもしれないですが、海上交易の要所として栄えたこの地域には、その面影を遺すものが今でも数多くあり、地形や史跡、人々の営みをあらためて眺めると、この地域に眠る文化や歴史が色鮮やかによみがえります。一見、景色以外何も無いようにも見えるこの湾には、実は多くの魅力が潜んでいました。自

身の感性や趣向に身を委ね、楽しみを選び味わうことができるこの地域の豊かさに私たちは気付かされたのです。また、この勉強会を通して共に学んでいく中で、この故郷を愛する仲間との繋がりが醸成されたと感じます。

一方、東日本大震災の影響もあり、我々の繋がりの根底をなすこの地域の魅力は急速に失われつつあります。この問題の重大さはこの地域について学んだ事により、より強く感じられるようになりました。私たちに何ができるのか。勉強会はそのことを考える大切な一歩ともなりました。

(土見大介)

チームwan(わん)とは？

塩釜のメンバーを中心に、松島湾域に暮らす人々、湾に興味のある仙台圏の人々が集う、オープンなネットワークで、「wan」には「湾」のほか「ワイドエリアネットワーク」の意も含む。

wan

### これまでのテーマ

- 「三陸汽船ファンの集い」 講師：大和田庄治
- 「藻塩焼神事の秘密」 講師：津川登昭
- 「初めて世界一周した日本人・津太夫と左平」 講師：錦晋
- 「白菜のふるさと浦戸諸島」 講師：高橋信壮 レポート vol.1
- 「俺らの財産・海苔を知る会」 講師：星博
- 「海から見た日本列島」 講師：山田創平 レポート vol.2
- 「ハゼのじゅずっこ釣り&松島湾のアマモ再生」 講師：伊藤栄明
- 「松島湾沿岸の貝塚群と塩づくり」 講師：菅原弘樹 レポート vol.3
- 「霊場・松島と伊達政宗のお月見」 レポート vol.4

# 白菜のふるさと浦戸諸島

vol.1

勉強会レポート

## 于-Lwan勉強会

松島白菜 Matsushima Hakusai

松島湾の浦戸諸島を中心に育成・採種された白菜品種群の呼称。1915（大正4）年に伊達家養種園の技師・沼倉吉兵衛が、隔離栽培できる島の環境を利用して採種に成功。1922（大正11）年には渡辺頼二が“渡辺採種場”を設立して桂島での採種事業を開始し、順次他の島へも拡大された。多くの島民の協力を得て純度の高い白菜種子が量産され、「松島白菜」の種子は全国の農村に広く供給されることとなった。地元宮城県でも大きな産地が形成され、「仙台白菜」の産地銘柄で全国に出荷、大正末期から昭和初期まで全国一の出荷量を誇った。



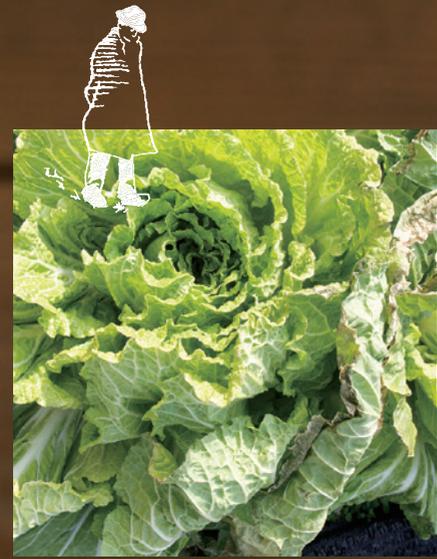
日本人に身近な食材の白菜ですが、浦戸諸島で種が採種されたことが日本での白菜の普及に大きく貢献したことを、私は知りませんでした。この日の勉強会では、白菜づくりの歴史や現在の高橋さんの取り組み、白菜を用いた食文化交流などについてお話をうかがいました。

白菜は、明治時代に中国から種が持ち込まれたものの交配がうまくいかず、国内で種を採るまでには多くの苦労がありました。白菜はアブラナ科アブラナ属で菜の花を咲かせる植物ですが、他のアブラナ科の植物と交配しやすく、当時は純粋な白菜の種を採ることが困難だったのです。種採りに成功したのは大正時代。伊達家養種園の技師・沼倉吉兵衛氏が様々な実験を行い、人工的に隔離した部屋で純度の高い種が採れたことをヒントに、離島での栽培を考え出しました。そして選んだのが松島湾の浦戸諸島。無人島だった馬放島で白菜の種のみを植えたところ、純度の高い種が実ったのです。こうして松島湾の島で採種された種には「松島白菜」の名がつけられました。大正11年には渡辺頼二氏によって渡辺採種場が設立され、島民の方々の協力を得て多くの種が採れるようになり、全国へ出荷されました。この種を使って宮城県内で育てられた白菜は「仙台白菜」と名付けられ、昭和初期まで日本一の出荷量を誇っていたそうです。

現在でも浦戸諸島では、朴島と野々島で白菜の種取りが行われています。2011年の東日本大震災後、高橋さんたちは、仙台市内や島の小中学生、ボランティアらとともに白菜の種植えを行い、採種文化の保存活動を行っています。また、

宮沢賢治の作品に登場する「白菜畑」をテーマに、岩手との地域交流や食文化を伝える活動をしています。

白菜にまつわる様々なお話から見えてきたことは、普段何気なく食している白菜には、その始まりの種一粒にも歴史が詰まっており、作り手の思いが込められているということです。地域特性を生かした食材づくりや、先人の知恵の賜物である白菜の種採りを絶やすことなく、地域資源として守り活かしていくことが、今の私たちにできることなのではないかと考えさせられました。（相原綾乃）



### 勉強会講師紹介

高橋信壮



私立明成高等学校調理科教師。2006年から多様な地域連携のもと、「食の学び」の活動「リエゾンキッチン」を進めている。東日本大震災後からは、塩釜市浦戸諸島の野々島で「白菜の採種文化の保存活動」を行っている。また「松島白菜のもととなった『聖平白菜』をモチーフに描いた宮沢賢治の作品「白菜畑」との出会いから、宮城と岩手の地域を結んだ食文化交流活動を展開している。

# 湾の記憶をたどる旅



## SCHEDULE

湾の記憶ツーリズム

2014年10月12日 浦戸諸島寒風沢島、朴島、宮戸島

海辺の記憶をたどる旅展

2014年12月21日 塩竈市公民館本町分室大講堂

「チーム wan 勉強会」を重ねることで見えてきた「湾の記憶」。これをより多くの人に共有するべく、体験プログラムと企画展を開催しました。

「湾の記憶ツーリズム」では、江戸時代の湾の記憶や浦戸諸島に暮らす人びとの目線、7000年前から変わらない湾の風景を体感するプログラムを企画。

「海辺の記憶をたどる旅展」では、これまでに集めた湾の記憶を一堂に会し、展示、トーク、ワークショップ、すごろくなど、多彩な表現を試みました。

## 「湾の記憶ツーリズム」に参加して

浦戸諸島と松島湾を存分に体感したあの旅は、歴史、暮らし、食、物語と音楽、人、未来、景観、その他多くの要素が詰まっています。私は妻と12歳の娘の家族3人で参加。しばらく故郷の塩釜を離れていた私には改めて地元と自分を見つめ直す貴重な旅となりました。

最初に訪れたのは寒風沢島。そこで約二百年前に凶らずも日本初の世界一周をした浦戸出身の船乗り、津太夫たちの物語と、その思いを唄にした「淡海節」を聴きました。実際に津太

夫の暮らしがあったこの島で聞いた物語に、彼らの望郷の念の深さを思うのでした。

その後、かつて船乗り達が日和を見た日和山へ。貴重な方角石を見たり、遊女達の願いが偲ばれる縛り地蔵に掛けられた逆風祈願という風習など、興味深い話を聞きました。そしてそこで聴いた遊女の思いを乗せた淡海節、三味線の音色と唄声で二百年前に誘われました。



島歩きから戻った民宿では島の恵み溢れる

昼食。初めて食べたギバサに感動しました。昼食後は牡蠣漁師の方の船で朴島へ向かいます。仙台藩の宝物が隠されていたといわれる朴島の海中へ、一年後の自分への手紙を入れたタイムカプセルを沈めました。一度目は重りが足りず失敗。日没を心配し、後は漁師さんに頼んで行くという事になりました。

が、「わけないから沈めよう」と言う漁師さんに従い二度目は成功。自分達の手で沈めた意味は大きく、地元の方の言葉の大切さに気付くのでした。再び漁船に乗り、通常連絡の無い海路で宮戸島に向かいながら、湾の話の聞きませ。塩釜市に属する朴島に住む漁師さんの生活は実は東松島市の宮戸島と密接とのことで、暮らしの中心が陸ではなく海になると、生活圏も大きく変わることになりました。

宮戸島に着くと、「壮観」と称される大森の山頂へ。登頂の達成感の中、今たどってきた島々と海路、そして美しい夕景の松島湾を一望しました。遠い昔からの地形が残る松島湾。縄文人も眺めた景色かと思うと、特別な幸福感に包まれました。

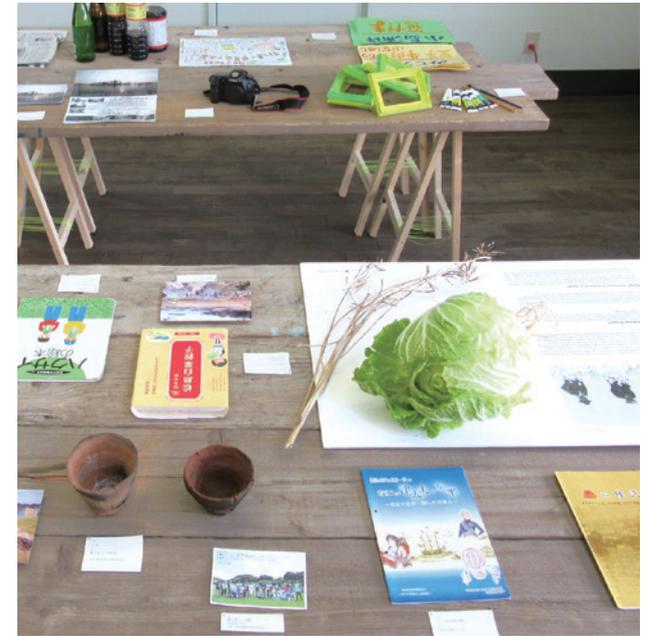
その後は陸路で本塩釜駅前へ。笑顔で解散する皆さんや、娘の「楽しかった」という

言葉に、皆、私と同じ気持ちなのがわかりました。

海からの視点に立って湾の一体感を見事に再現したスタッフの皆さんに感謝。多彩な行程にも島時間のリズムを壊さない見事な構成。プロのガイドがいる訳でもなく、地元をはじめ様々な出身地や経歴をもった方々が作ったこの旅は、個性豊かで、多くの人々に自慢したくなる、湾への愛情いっぱい旅でした。

今回の旅を通して私たち家族が出会った記憶や暮らし、そしてそこに見えた地元との関わりは、更なる誇りと愛着を持ち、新たな自分の記憶となって未来へ続いて行くでしょう。(藤崎 秀昂)





## 海辺の記憶をたどる旅展

塩竈市公民館本町分室大講堂  
2014年12月21日

つながる湾プロジェクトを通して得た湾の財産を一堂に集めた、参加型の企画展。湾の記憶を疑似体験できるすごろくを会場の中央に設置し、周囲には各プロジェクトで使った道具や「同居湾 (P34)」の写真を展示したり、「そらあみ (P22)」、「語り継ぎのリーディング (P30)」を体験できるワークショップブースを設け、トークイベント等も行いました。



vol.2

勉強会レポート

# 子-Lwan勉強会

製塩土器 Seien Doki

日本では土器で海水を煮詰めた「土器製塩」が最初の製塩法といわれており、東北の太平洋沿岸に縄文時代の製塩遺跡が点在するが、とりわけ松島湾沿岸には遺跡が集中している。製塩土器は ①大きさ20cm～30cmの深鉢で、小さな平底か、尖っている ②外面に模様が無く、全体的に薄くつくられている ③火を受け赤く変色している ④表面や器壁にも塩の結晶ができるため割れやすく、破片で出土するという特徴があり、一度の塩づくりにしが使えなかったと考えられる。

縄文時代  
約1万6,500年前  
～約3,000年前  
Jomon period



松島湾には湾内に流れ込む大きな河川が無く、縄文時代以前から地形がほぼ変わらずに残っています。そのため沿岸には貝塚が多く確認され、中でも東松島市宮戸島にある里浜貝塚は縄文人の生活を紐解く上で貴重な史跡とされています。この日は菅原弘樹さんのお話で、縄文時代の松島湾に思いを馳せました。

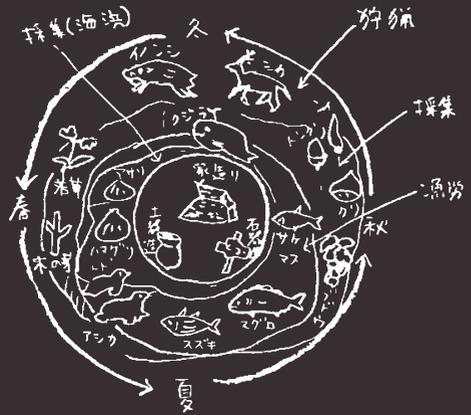
貝塚とは単なるゴミ捨て場ではありませんでした。貝の殻や魚の骨の他にも、割れた土器や工作くず、儀式器具や死者の埋葬まで、縄文人の生活の全てを自然に帰す場所だったのです。そのため、貝塚の調査から当時の生活を驚く程に細か

た現代でも変わることなく続いているのではないのでしょうか。(大沼剛宏)

く明らかにする事ができます。

例えば、縄文時代の食生活は意外にも豊かでした。季節ごとに違う木の実やキノコを採集し、旬の魚介を食べていました。現在と同じように春にはアサリを夏にはウニを秋には牡蠣を食べ、スズキやアイナメを釣っていたのです。また、縄文人は「生業カレンダー」を持っていたことが分かっています。貝塚が示す食の季節サイクルと同じ層から出土するものを調べることで、その季節に何をしていたかを確認できるのです。松島湾沿岸一帯で製塩土器が出土するため、この地域で縄文時代に製塩が行われていた事が分かっています。製塩は夏頃に行われていたと推察されます。

大量の薪燃料を必要とする製塩は、薪を求めて浜から浜へ周期的に移動しながら行われました。生成量を見ると、当時の集落規模に必要な分を大幅に越えた量が製塩されており、塩と塩蔵品を用いて交易を行っていた事が考えられます。内陸では塩の産出がないのでたいへんな貴重品であり、もしかしたら、松島湾産の塩は一種のブランド品となっていたのかもかもしれません。山形で産出する石材で



つくられた石器が里浜貝塚から出土する他、内陸部で製塩土器の破片が出土するなどしており、塩の交易を裏付けるものとして、今後の研究により明らかになるかもしれません。

松島湾沿岸の貝塚群の調査はまだほんの一部しか進んでおらず、縄文人の残した営みの歴史が今尚眠っています。それでも解ってきた事は、この地に生きた人々は穏やかで豊かな湾の恵みを頂いてきたということです。それは数千年を経

勉強会講師紹介  
菅原 弘樹



多賀城市出身。與松島縄文村歴史資料館館長兼学芸員。専門は考古学。松島湾を中心に、縄文人の生業や食生活の解明が主な研究テーマ。震災後は、地中に残された震災履歴の確認と縄文時代以来受け継がれてきた宮戸島の自然や景観、歴史、文化を活かした復興まちづくりの実現に向けて取り組んでいる。



## そらあみ — 松島 —



《そらあみ》は、参加者と共に空に向かって漁網を編むことで、人をつなぎ、記憶をつなぎ、完成した網の目を通して土地の風景を捉え直す、アーティスト・五十嵐靖晃によるプロジェクトです。古代から世界各地で営まれてきた漁網を「編む」という共同作業の中に、過去から未来へ引き継がれる縦軸（時間）と、海を越えてつながっていく横軸（空間）のふたつの方向性を持って“コミュニティをつなぐ所作”としての可能性を考えます。これまで全国10数カ所、2014年6月にはブラジルでも実施。「つながる湾プロジェクト」では、2013年8月に浦戸諸島、2014年8月は松島で実施しました。

「そらあみ — 松島 —」では「霊場松島」の風景に浮かぶ「月」を捉まえることを目的としました。日本三景の1つである松島は、今は観光地として知られていますが、かつては、湾に囲まれた穏やかな海に遥か彼方まで無数の島が浮かんだ、この世のものとは思えないほど美しい風景に、極楽浄土を見出した多くの僧侶の修行の地でありました。また民衆にとっても極楽往生を願いに、たくさんの方が遺骨を持ち込んだ祈りの地でもありました。そして、この地に伊達政宗公が伊達家の菩提寺として建立した瑞巖寺の参道は、年に一度の中秋の名月がこの松島の海に昇る姿を眺められる角度に、わざわざ設定されているそうです。時が流れても風景は変わりませんが、見ている人がそこから見出すものは変わっていきます。ですが、伊達政宗公が未来に残したかったメッセージは、さざ波に浮かぶ満月を愛でる「霊場松島」としての視線だったのではないかと考えました。故にプロジェクト最終日を中秋の名月の日とし、完成した《そらあみ》を通して満月を愛で、その視線を、今を生きる我々と重ねてみる会を具体的に設定しました。

当日はなんとか天候にも恵まれ、網が捉えた満月を眺めに《そらあみ》に関わった多くの人が集い、「霊場松島」に想いを馳せつつも、再会と出会いの場となり、一つの大きな湾をプロジェクトの舞台と定めた《つながる湾、プ

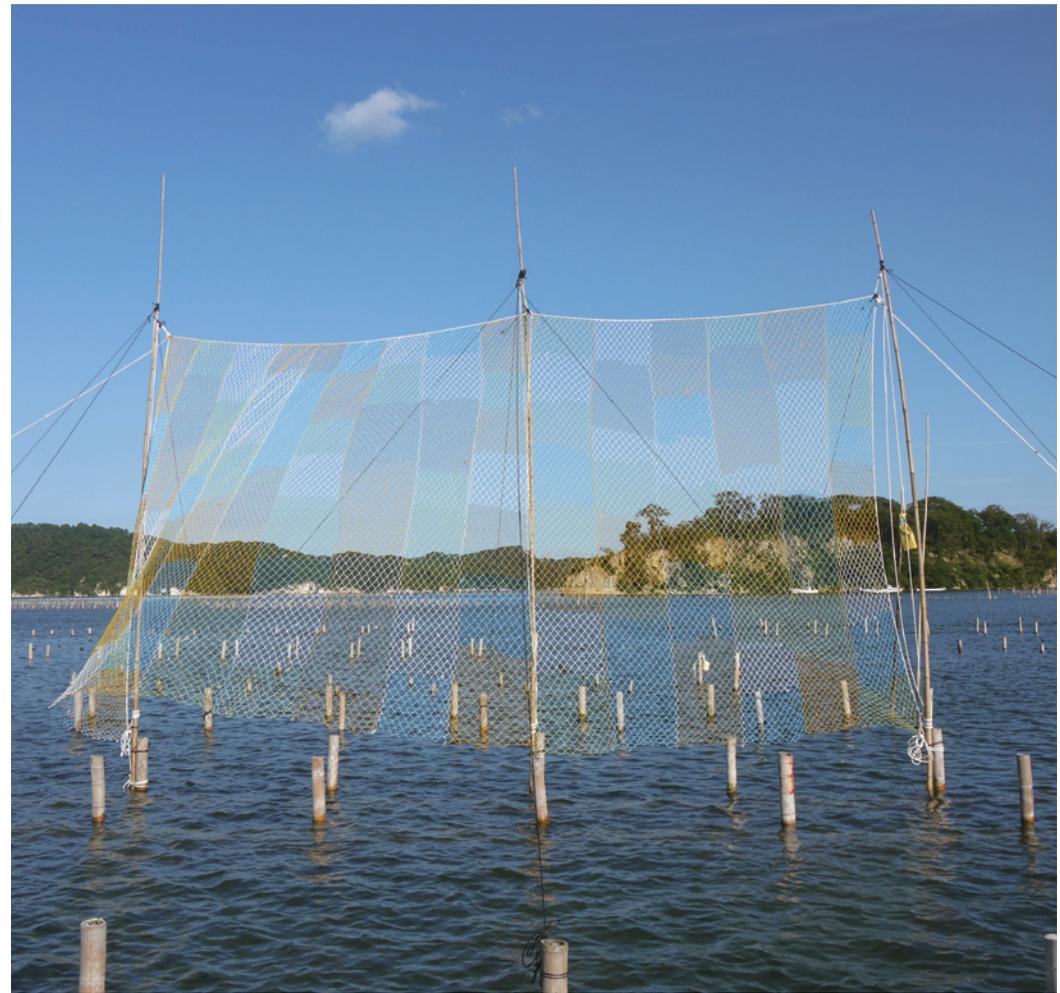
ロジェクト》における《そらあみ》の2年分の成果を象徴するような機会となりました。

そこには、松島湾で獲れたアナゴが届き、すぐ側で毎日「そらあみ — 松島 —」を応援してくれた、いかぼっぼ屋さんがその場で白焼きにしてくれ、《そらあみ》の活動に興味を持ってくれた蕎麦打ち職人さんたちが手打ち蕎麦をその場でつくってくれ、去年「そらあみ — 浦戸諸島 —」でお世話になった浦戸諸島の漁師さんが、湾を越えて大量のワタリガニを持って来てくれ、他にも様々な御馳走が人と共に集い、プロジェクトを通して、海を超え、人を介して湾がつながっていつている姿がありました。

一人一人という「点」と「点」が、出会いという「線」でつながり、それらが複雑につながり大きく広がっていつている様子は、まるで網を編み広げていつている状況と重なって見えました。ふと一つのイメージが浮かびました。湾全体を空から覆うように網が対岸から対岸へと伸びていくイメージです。つながる湾、プロジェクトで《そらあみ》を編むと、いつかそんな風景を見たいと思わせてくれます。湾がつながることではじめて見えてくるモノやコトは、時間や空間を超えて、まだまだたくさんあると感じた2年目でした。

（五十嵐 靖晃）





[右ページ] 2013 年  
 上：浦戸諸島・朴島にある牡蠣棚上に掲げたそらあみ。  
 下：そらあみを編む浦戸諸島の島民たち。  
 [左ページ] 2014 年  
 上：そらあみ越しにみる月と金波。霊場・雄島にて。  
 下：霊場・雄島に掲げたそらあみ。

五十嵐靖晃 (アーティスト)

東京藝術大学大学院修了。土地に住み、そこで出会う人と共に、普段の生活に新たな視点と人の繋がりをつくる試みを行う。代表作は、福岡県太宰府天満宮との協働プロジェクト「くすかき」、住民たちとともに新たな風景をつくり上げる「いろほし」「そらあみ」など。



このように、特異な地形から生まれるたくさんの魅力を、ここ松島は持っています。歴史を知り、過去の人々に思いを馳せたり、昔と変わらない月の姿を眺めたりと、趣深い松島の魅力を再発見することができました。(シエランガスキー ひかり)

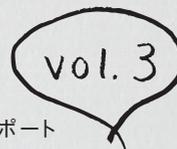
松島にとっても関わりが深く重要な人物です。政宗は瑞巖寺を伊達家菩提寺として再興しました。その際に、中秋の名月の日、ちよど月が昇る位置に合わせて参道の角度を計画しています。海岸には豊臣秀吉からもらい受けた伏見桃山城の茶室をそのまま移築し(今の観瀾亭)、さざ波に浮かぶ月を眺めていました。政宗は松島で月を見ることをとても大事にしていたようです。

今も国宝として残る瑞巖寺の建立にあたっては、最高の材料と技術にこだわり、遠く紀州から最高級の建材を大工と共にわざわざ取り寄せていました。その時に材木を運ぶ船乗りたちも松島に渡り、瑞巖寺近くに暮らしていました。彼らは「水主(かこ)衆」と呼ばれ、今も「水主町」として地名が残り、子孫が松島で暮らしています。

観光地としての松島の起源は、江戸時代にあります。塩釜から船に乗り、島巡りをしながら雄島や瑞巖寺を参拝し、松島湾を見渡せる富山観音を巡るコースだったそうです。松尾芭蕉が松島を巡ったのもそのコースです。江戸を出発する時に「松島へ行くのが楽しみだ」と句を詠んだ芭蕉は、実際足を運んだ松島では感動しひとつも句を詠めなかった、という話も残っています。

## 霊場・松島と

## 伊達政宗のお月見



勉強会レポート

## 于-L wan 勉強会

雄島 Oshima

修行・死者供養の霊場として、古くから多くの修行僧が訪れたとされる小島。かつては船で渡っていたが、現在は朱塗りの渡月橋が架けられている。島のあちこちに修行僧が掘った岩窟・仏像が残され、当時の風景を忍ばせる。

雄島からは、静かな波音に包まれて、松島湾の穏やかな風景を眺める事ができ、心穏やかに時を過ごした修行僧達の姿を想像できる。



日本三景のひとつ松島は、2600余りの島々が松島湾に浮かんでいて、とても不思議な、そして美しい景色を私たちに見せてくれます。今は観光地として知られている松島ですが、古くから松島の美しい海と島々の光景は極楽浄土を思わせ、あの世とこの世を結ぶ霊場として多くの人々に信仰されていました。その「霊場・松島」の中心となるのが雄島です。死者の弔いに遺骨を埋葬するため、そして僧侶たちが修行の場として、雄島を選びました。今でも雄島には、当時の修行僧がこもっていた岩窟が数多くみられます。雄島は松島の地名の由来にもなった場所です。昔、見仏上人という僧侶が雄島に長年こもって修行した結果、法力を会得し、その偉業を讃えた当時の天皇が千本の松を送ったと言われています。そのことにより千松島(ちまつしま)と呼ばれ、いつしか松島になったということです。

松島の素晴らしい景色は、島々だけではありません。松島湾の波は、外海に比べてとても穏やかです。そのため海面に反射する月の光がきれいに表れます。満月が昇りはじめの頃、海面に映る金色に長くのびる月明かりを「金波」と呼びます。月が高く上がると月の色は白く変わり、海面に映る白い月明かりを「銀波」と呼びます。の松島の美しい海と月の光景には、昔の人々も同じように魅了されていたことでしょう。

伊達政宗も松島に魅了されたひとりです。伊達政宗は

# URATO SHOKUDO PROJECT

浦戸食堂 まりこさんのカレーとその記憶

食堂プロジェクトは、アーティスト・増田拓史が、各地で日常的に食べられている家庭料理から、その背景にある人々の姿や記憶、その地域が持つ固有の文化を記録し、後世へ伝えていくプロジェクトです。今回は、塩釜市浦戸諸島の寒風沢島を舞台に、島に暮らす人たちと一緒に、地域の記憶と物語を掘り起こしました。



2014年春、アーティスト・増田拓史は、塩釜市在住のメンバーらと浦戸諸島でのリサーチを開始しました。そこで、かつて浦戸諸島のひとつ、寒風沢島にあった喫茶店「ゆとりろ」の存在を知ります。東日本大震災の津波によって、今はもうなくなってしまった「ゆとりろ」。そこには、長年浦戸諸島で愛されてきた、店主まり子さんとカレーに関わる多くの人の記憶がありました。

浦戸食堂プロジェクトは、まり子さんと、まり子さんのカレーを知る人々へのインタビューをもとに「まり子さん」「まり子さんのカレー」「ゆとりろ」の記憶を辿ったものです。そして2014年12月21日(土)、寒風沢島にて、インタビューを記録した映像作品と、まり子さんのカレーを囲む会を開催。まり子さんとの時間を懐かしむ島民や県内外からの参加者が交流し、記憶を共有しました。

今回のプロジェクトを通じて、まり子さんやまり子さんのカレーに関わるさまざまな人の記憶や思いに触れました。インタビューでは、漁から戻り、毎日のように過ごしたまり子さんとの時間。網仕事で、深夜に注文した手料理が美味しかったこと。本土への最終の船が来る前に食べた、まり子さん



のカレーや手料理のこと。「ただ集まるだけで楽しかった」と、友人達とゆとりろで過ごした日々など、何も知らない私たちに、当時の暮らしの様子を想像させました。まり子さんは、2日がかりで仕込んでいたカレーのこと、「ゆとりろ」を始めたときの想いや常連さんとの楽しい日々や苦勞、そして現在の島への想いなどをお話してくださいました。

また今回、実際にまり子さんのカレーを食べることで、誰かの記憶の中にしかなかった「まり子さんのカレーの物語」が自分の記憶になっていくのを体験しました。私を含め、この島々と何の繋がりもなかった人々の中にも、この体験が新たな記憶として紡がれ、私たちとこの土地との間に大切な関係性を生んでくれたように思います。

事実の記録はとも無機質です。少し勇気を出して、細部に向き合ってみると、事実の周りには、人々の人生、暮らし、なげないけれど愛おしい物語に溢れています。私たちは、このプロジェクトによって丁寧に集められた多くの物語に感動し、共感したとき、改めてそれを未来に伝え、残していきたいと思えました。(松村翔子)

## 増田拓史 (アーティスト)

1982年生まれ。横浜美術短期大学卒業。宮城県石巻市在住。特定のコミュニティや地域をリサーチし、作品を制作している。その手法として近年では、日常の家庭料理にフォーカスをあて、個人の出自や地域性を再発見し後世に伝える食堂プロジェクトを行っている。アウトプットの方法は領域横断的に行う。主な活動に、2014年「大館食堂 / 大館・北秋田芸術祭 2014」(秋田)、2013~2014年「前橋食堂 / アーツ前橋地域アートプロジェクト」(群馬)、2011年「黄金食堂 / 黄金町ハザール 2011」(横浜)、2010~2011年「Treasure Hill Artist Village Public Art Project」(寶藏巖国際芸術村 / 台北・台湾)など。

# 語り継ぎのための リーディング



## 一人一人が自分の方法で 地域の物語を伝える。

「語り継ぎのためのリーディング」は、地域の物語や先人の知恵を、今を生きる私たちが自分事にして語り継いでいくきっかけを創出する取り組みです。同じ土地に生きた先人の物語に想像を膨らませ、自分たちの価値観を添えて次世代へ語り継ぎます。方法は物語の朗読に限らず、歌や詩を用いたり、時には調理方法や衣類の制作といった疑似体験を通し、より多面的な理解を通して一人一人の表現方法を引き出すことを試みています。

### 高田彩 (ビルド・フルーガス代表)

1980年、宮城県塩釜市出身。エミリー・カー美術大学(カナダ・バンクーバー)卒業。  
アーティストネットワーク「ビルド・フルーガス」代表(www.birdoflugas.com)、2006年宮城県塩釜市にbirdo spaceを開廊。  
地域の人々を巻き込んだアートプロジェクトや、クリエイティブな視点と表現方法で新たに塩釜の魅力伝えるウェブサイト「クラシオ」(www.kurashio.jp)等の企画運営を行う。

浦戸諸島野々島にある塩釜市立浦戸第二小・中学校では、浦戸の民話や風土、言い伝えなどを題材にした演劇活動を通して、生徒や島民の誇りを育み続けています。「語り継ぎのためのリーディング」で最初の題材とした「海よりも風よりも」は2009年に上演された作品で、江戸時代に千石船「若宮丸」で漂流し、図らずも世界一周を果たした寒風沢島出身の乗組員・津太夫と左平の物語です。この逸話は、鎖国をして

いた当時の時代背景や、文献資料として充分ではないことからこれまであまり語られませんでした。演劇となることで私たちの想像力や興味関心をかき立ててくれました。

私はこのような取り組みに触れ、共感すると同時に、浦戸諸島の物語は島だけの物語ではなく、私たちが育んできた地域の文化圏の物語であると感じられました。そこで、このような「土地の記憶」を紐解き、一人一人が自分の方法で地域の物語を伝えていくきっかけになればと、「語り継ぎのためのリーディング」をスタートしました。今を生きる私たちが、地域の物語を自分事として捉え直し、時代時代の口承者として、

次の世代へ自分たちの生きた証を添えて引き継いでいこうという取り組みです。

2013年12月に寒風沢島で行ったリーディング会では、浦戸第二小学校6年生の本郷笙吾くんによる語り継ぎ、民謡歌手・木島裕さんによる「淡海節」に想いを乗せた歌い継ぎを行いました。本郷くんは、波瀾万丈な人生を生き抜く船員たちの生きる強さを語り、木島さんは、大海原に浮かぶ漂流船で家族を想う船員の哀切な心情を、三味線の音色と共に表現しました。2014年1月からはワークショップを中心に展開し、青谷明日香さんらシンガーソングライターを講師に招き、参加者たちは漂流民になった船員たちの揺れ動く繊細な心情を歌詞に綴りました。また、異国での食生活や習慣に関心を寄せながら、天然酵母パン屋オフルニルデュボワ(鈎取本店)を講師に、漂流民が初めて口にしたパンを想像するパンづくりを行いました。

漂流民の異国での日々は、苦難だけではなく、好奇心を掻き立てる異文化との出会いにも満ちあふれています。コラージュ作家wool・cube・wool!を講

師に招き、参加者それぞれが、漂流民たちの印象に残ったロシア皇帝・アレクサンドル一世の勳章をつくりました。目新しかったらう皇帝の身のこなしを、漂流民になりきって想像することで、先人たちと私たちの感覚を結びつけるワークショップです。

ワークショップを通し、参加者自身が記した感情や考えは、名前とプロフィール、制作年を添え、地域住民の視点や価値観を収めた記録としても新たに残していきたいと思えます。

地域の歩みには、今と変わらぬ人間ドラマがあります。私は、一人一人が土地の記憶をどのように感じ、想像し、読み解いていくかが大切だと考えます。この企画を、今と昔を、私たちが先人を結びつける装置として、また土地から学び続けるための一つの方法として、機能させることができると考えています。

# 語り継ぎのための リーディング

## 海よりも風よりも



「語り継ぎのためのリーディング」で題材として用いているのは、江戸時代の漂流民を描いた「海よりも風よりも」の朗読台本です。数奇な運命をたどった船乗りたちの物語を簡単にご紹介します。

### あらすじ

1793年初冬、石巻の千石船・若宮丸は、仙台藩から江戸幕府へ納める米俵と木材を積み、石巻を出港した。この船には、浦戸諸島出身の船乗りが6人、乗組員として乗船していた。

ところが出港して1週間後、若宮丸は激しい嵐に遭い、舵を失って漂流する。半年後、アリューシャン列島に流れ着いた一行はロシア人に保護され、シベリアの中心部にあるイルクーツクで家と生活資金を与えられ、9年間を過ごす。一見平和な異国の地での暮らしだったが、9年のうちに3人がこの世を去り、4人の若者が帰国をあきらめてロシア正教の洗礼を受けた。1803年、日本との交易に漂流民たちを利用しようと考えた新ロシア皇帝アレクサンドル1世は、若宮丸乗組員を呼び出して帰国の意思を尋ねる。東松島市市浜出身の儀兵衛と多十郎、浦戸諸島寒風沢島出身の津太夫と左平の4人が帰国を希望し、一ヶ月後、ロシア初の世界周航船「ナジェージダ号」で出航。翌年9月、長崎港に入港し、図らずも初めて世界を一周した日本人となる。

しかし鎖国政策中であった江戸幕府は彼らの上陸を拒み、多十郎は絶望して自殺未遂をおかす。翌年3月、ようやく日本に引き渡されるが、長崎に留め置かれて詮議を受け、さらに江戸の仙台藩下屋敷で取り調べを受け、故郷に戻ることができたのは石巻を出港してから13年後、1806年の冬の終わりであった。

津太夫と左平はその後故郷の寒風沢島で平穏に暮らしたが、再会した家族やロシアに残してきた仲間たちに迫害が及ぶのを恐れ、生涯口を閉ざしたという。



1. ロシア皇帝の勲章を想像して作ったブローチ。2. 参加者一人一人の物語が書かれた台本。3. 台本に書かれた物語は参加者によって語り継がれる。4. 漂流民たちがロシアで初めて口にしたパンを再現。



## 同居湾

～ 2013 浦戸諸島 ～

喜多直人さんは2013年、TANeFUNe船長の船長をつとめ、浦戸諸島を巡回する移動式カフェ「TANeFUNeカフェ」を開きました。それから約1年。「喜多船長が撮った島の写真が観てみてえ」「なにを撮ったが見せてける」と島民からの声が届くようになりました。その声に応えるため、また、東日本大震災から刻々と風景が移るいゆく浦戸諸島の現状に目をむけるきっかけとするため、2014年7月から9月の約2ヶ月間、野々島にて写真展を行いました。

Doukyo Wan  
at Urato Island  
2013



## 喜多直人 (写真家)

石川県金沢市で生まれ育つ。『自然と人間の同居』をテーマに、誰かにとっては日常、誰かにとっては非日常を記録する。TANeFUNe船長として2013年6月より宮城県塩釜市に滞在、浦戸諸島でTANeFUNeカフェや宝ものづくりのワークショップを行った。



2013年のTANeFUNeの活動を終えて、70年ぶりの大雪になった塩釜の冬を越え、また季節を感じながら浦戸諸島に通っていると、津波で流された栈橋が新設され、近くに待合所とトイレが建ち、御神輿が復活した寒風沢島をはじめ、栈橋付近が一部新しくなっていたり復興住宅が建ち始めたり、4島5地区の島の風景がそれぞれに変容していくのを体感しました。視覚的なモノだけではなく島の人たちとの関係性も変化し、島に行く度に島の人たちから「去年喜多さんが撮った写真が見て〜」と言ってもらえたのです。TANeFUNeがあり、船長としての関わりもあり撮影した様々な写真達に声がかかったので、塩釜の仲間達に相談し、島での写真展『同居湾〜2013浦戸諸島〜』を開催するに至りました。

展示する写真は、一年前と比べて変わったもの変わらないものをテーマに、島の人達はもちろん島外の人たちにも体感してもらえたらと、いつも以上に「誰かにとっての日常、誰かにとっては非日常」を意識しました。

展示場所は、春から野々島にオープンした、市営汽船の待合室でもあり、ギャラリーや憩いのスペースでもある「うらとラウンジ菜の花」。一年前の人や景色や日常を凝縮させ、島のお母ちゃんとの会話で聞いた「島のみんなは親戚みたいなもんだ〜」がなんだか腑に落ちていたので、島それぞれ、人それぞれではありながら、

お互いが島で暮らしている親戚であるようなイメージを込めて展示。見に来てくれた島のお母ちゃんが、これは石浜の〇〇ちゃん、これは〇〇ちゃんと友達の名前を口に出しながら見てくれてとても楽しそうだったのが印象的で、「写っているのが知り合えばっかりだからいい」といった、なんだか嬉しい声も頂きました。

栈橋近くの船着き場には、一年前は冠水して大変な状況だったのにすでにコンクリートが打たれて景色が変わった場所があり、そこに、現在と比較できるように一年前の写真を大型写真にして展示。今回の写真展ではぜひ島の人達と話をする場を設けたいと思っていたので、写真展のクローキングに合わせて野々島での芋煮会を計画、塩釜の醤油、笹かまぼこ、日本酒、野菜、七ヶ浜のお米、山形の肉や里芋などなどの食材を今まで出会った方たちに協賛して頂き、60名ほどで食事をして、写真のスライドショーを見ながらいろいろな人が混ざって話をしたりもしました。

島の人たちと写真を前に話をすると、記憶が交差しでどんどんとその写真に物語が加わっていくのを実感します。細かい変化があるのは当たり前だけれど、大掛かりなセメントやコンクリートは風景の変化としてはインパクトが大きいし、島の風景が変わる。でも、風景から生まれた誇りは消えるわけではなく日常に潜んでいるだろうし、場面場面で形を変えて現れながら、人と土地を形成している気がします。



TANeFUNeがその航海によって伝えようとしている「海からの視点」。この日の勉強会では、水域に暮らす人々を研究している山田創平さんから、「海側から日本列島を見る」ことを軸に、日本の海洋文化について学びました。

山田さんの文献研究から、これまでとは違った歴史や価値観が見えてきました。たとえばある漁村では、漁で獲ってきた魚はまず初めに家族や地域の人々に分けてから市場に出していたというのです。人々との分かち合い、いわゆる資源の分配がごく日常的に行われていたということ。そこには、近代以降の国家が持つ階層、征服、資本主義といった特質とは相反する価値観があったことに気づかされました。

また、民俗学者の柳田國男氏が示唆したように、日本の土地を国の領土としてではなく、海流の流れの中に位置する列島と見るとより様々なことが見えてくるという視点も、興味深いものでした。山田さんは、文化は黒潮に乗って南から北へ流れてきており、その流れを受けて日本文化は形成されているという見解を提示されました。

山田さんと文献に記された絵や写真を見ながら、日本と東南アジアに多くの共通点があることを確認しました。各地にみられる船を競わせる行事や、船の形の共通点、日本誕生の神話とされる「イザナギとイザナミ」の話と似た物語がパプアニューギニアの逸話にもあることなど、黒潮による文化の形成を裏付けるような資料が並びました。ほかに、日本の海洋文化の特徴として①天体への信仰 ②製塩、製鉄などの海洋民の生業 ③人は海の底に沈んでいくという死生観などが挙げられ、地域が違えど海に暮らす人々にはある共通した文化があることを学びました。この日の学びから、塩釜の「藻塩焼き神事」に代表される塩づくりや、山田さんが見つけたという塩釜神社の石碑に刻まれている太陽、月、星のモチーフも、この海洋文化と何らかの関係があるように思えてなりませんでした。

海に暮らす人々の生活を見ていくと、地域を超えた海づたいの文化があることに気づきます。「海の視点」から日本の文化を新たに紐解きながら、視野を広げて地域を見ていくことの面白さを体感することができた勉強会でした。(相原綾乃)

## 海からみた日本列島

vol.4

勉強会レポート

## 于-Lwan勉強会

柳田國男『海上の道』 Kaijyo no Michi

民俗学者・柳田國男による昭和36年の著作。柳田が24歳であった明治31年、渥美半島の伊良湖岬に椰子の実が流れ着いているのを見たことに端を発し、その後の自身の研究により収集した宝貝の分布や鼠が海を渡る伝承を手がかりに、日本民族の祖先は南方から稲作技術を携えて「海上の道」を北上し、沖縄の島づたいに渡来したという仮説を披露している。



船の形や  
神話の共通点



### 勉強会講師紹介

山田創平 (社会学者)



社会学者。専門は地域研究、芸術と地域、マイノリティと地域、都市空間論。京都精華大学人文学部専任講師。NPO法人アートNPOリンク理事、大阪市現代芸術創造事業実行委員、HAPS実行委員などを兼任。また現代美術作家のブ・ド・ラ・マドレーヌらと共にインスタレーションやパフォーマンスの制作・発表もしている。世界各地の水辺をめぐり、水を切り口に新しい社会のあり方を模索している。

# 水の記憶をつなぐ



ここで何かやるには湾で考えればいい

谷津 2013年にTANEFUNEが松島湾にやってきたのをきっかけに「つながる湾プロジェクト」が始まりました。「海からの視点」をテーマにしようと決めたものの、漠然とし過ぎていて「何をやらたいんだろう？」という感じだった時に「湾」のコンセプトを提示してくださったのが津川さんでしたね。

津川 僕の考えの根底にあるのは地形なんです。この地域は湾を持っていて、それは美しい景色を生み出していますし、調べてみたら湾の水で塩を作っていたり、全国に出荷する種牡蠣を養殖していて、広島の種類牡蠣の多くはこちらのものだとか、地元の僕らがあり知らないけれど、自慢したいことがどんどんどんどん出てくるので面白くなって、「湾」というテーマで活動したいと思っていました。

谷津 津川さんは塩釜市のご出身ですが、今住んでらっしゃるのが多賀城市で、お勤めは仙台市です。津川さんご自身も、以前は、塩釜市が地元だから地元に対して何かやりたいという気持ちを持ちながらも、なかなか出来なかつたとおっしゃっていましたね。

津川 そうですね。塩釜の人には「なんで多賀城市に住むの？」とか言われましたし、僕も多賀城市にいくと多賀城の顔、塩釜にくると塩釜の顔という風に、知らないうちにスイッチが切り替わってたんですけど、なんかおかしいな、一緒にできないのかなとずっと思っていました。震災の前はあまり海に出たことは無かつたんですけど、震災後に友達の子が牡蠣漁師の船に乗って海に出て、湾の中心から「塩釜はあそこだよ」と言われて見た時に、地形が全部つながっているのが分かって、多賀城だとか塩釜だとか、なんて小さいことを言っていたらどうだろうと。ここで何かやるには湾で考えればいんだと、言葉ではちょっと足りな

2014年に実施した「そらあみ —松島—」では、松島町産業観光課の佐藤綾さんのご協力により、「霊場・松島」の原点である雄島と、伊達政宗が中秋の名月を眺めた瑞巖寺の参道に「そらあみ」を掲げることができました。

佐藤綾さんはつながる湾プロジェクトと「そらあみ」をどう捉えていたのか。「そらあみ」で実現したものは何か。つながる湾プロジェクトは何を目指すのか。

「そらあみ」の作者である五十嵐靖晃さんと、つながる湾プロジェクトのコンセプトを提唱した津川登昭を交え、語っていただきました。

(聞き手：谷津智里)

※このページでは、2014年12月21日に行われた「海辺の記憶をたどる旅展」で行われたクロストークの内容を掲載しています。

いくらの力強いメッセージを、風景が僕に与えてくれました。そこから「湾」で考えるようになりました。

谷津 行政区が違ったり、住んでいる場所、働いている場所が違うともう、私たちは違う地域だと思いがちですが、「実は人間が引いた行政区とは異なる一つの文化圏というものがあるんじゃないか」というのがこのプロジェクトの根底の部分なんです。そうしてスタートした「つながる湾プロジェクト」ですが、その一つとして、去年は塩釜市の浦戸諸島で「そらあみ」というプロジェクトをしました。今年は、場所を移して松島町で「そらあみ」を行いました。その辺りの経緯と、どういう作品かということとを五十嵐さんからお話しいただければと思います。

網を編みながら人と地域を編む「そらあみ」

五十嵐 「そらあみ」では、訪れた土地でその土地の人たちと漁網を編みます。「網を編む」というのは大昔から人類の歩みとともにある所作なんですけれど、編んでいるとその土地に流れている風の音や空気に触れたり、おじいちゃんおばあちゃんの井戸端会議が聞こえてきたり、土地の声を聞く時間があるんです。編み上がると、最後、空に向かって展示するんですけど、背後が青空だと水色の糸で編んだ部分が透明に見えたり、白い雲が漂ってくる今度は白い糸で編んだところが透けたり、逆に赤なんかの色は飛び出して見えたり、眺めていると、普段見ている風景が少し違って見えるというかズレて見えるような感覚があって。ともに編み、時間を過ごし、最後に、空に掲げた網越しに立ち上がった風景を眺めて、今生きている世界をもう一度見つめ直すきっかけにしてみよう、という作品です。去年は浦戸諸島で編



んで、最後に朴島の牡蠣棚の上に展示させて頂きました。で、高田さんだったり津川さんと今度は松島でやってみたいと話していたところで、綾さんに出会った。

谷津 綾さんは、最初お話を聞いた時はどんな印象でしたか？

佐藤 私、「つながる湾プロジェクト」のパンフレットを事前に拝見させて頂いていて、「そらあみ」のことも知っていたんです。それで、高田さんに「松島でできないでしょうか？」と言っていたんですけど嬉しくなっちゃって。漁網を編むことでその土地の文化も編むというコンセプトがすごく私の中で響いて。松島はいわゆる日本三景ということですが、もともとは「霊場」であり人々が祈りを捧げる場所だったという歴史があるんです。「そらあみ」でそういうところを伝えられたらすごく素敵じゃないかと考えて、「雄島を見ながら編んではどうですか？」とご紹介して。雄島は元々瑞巖寺さんと深く関係がある場所だから、雄島と瑞巖寺で「そらあみ」の展示を実現するお手伝いができたらなと。それが始まりでした。



う一つキーワードとして出てきたのがお月様だったんです。瑞巖寺は伊達家の菩提寺で、政宗公が約5年をかけてリニューアルオープンさせたそうなんです。京都から職人を呼んで、柱が一回でも地面に付いたら縁起が悪いから使わなかったとか、いろいろ話が残っているんですけど、中でも一番驚いたのが、参道が中秋の名月が昇る角度に合わせてあると。

佐藤 政宗公は本当に松島でのお月見が好きだったみたいで、お月見を楽しんだ島とかもあるんですけども、瑞巖寺の設計をするときに、参道の真ん中から中秋の名月が愛でられるように作ったそうなんです。

五十嵐 わざわざ瑞巖寺をリニューアルオープンさせて、わざわざ南東方向に参道を位置づけて、多くの人がそこを歩いて参拝し、帰っていく。政宗公がそうまでして遣じたかったもの、未来を生きる人達に伝えなかったものは何なのかと考えると、実はそれは「霊場松島」の風景なんじゃないかと。中秋の名月が参道の先が上がってきて、穏やかな波間にキラキラと波が輝くまさに極楽浄土、あの世とこの世をつ

谷津 五十嵐さんは全国各地をプロジェクトで回っていらっしゃって、行政の方とお話をすることも多いと思うんですが、綾さんの印象はどうでしたか？

五十嵐 話が分かるというか、共通言語が多いですよ。いろんなところで「そらあみ」を編んできたんですけど、その土地で編む理由というのがやっぱり必要なんです。「何故編むのか」という。最初にお会いたした時に、雄島だったり瑞巖寺だったりを案内していただいたんですが、どれもすぐに響くものがあった。綾さんは土地の声を引き出す、声を通訳して下さる存在だというのが、最初出会った時の印象でした。

佐藤 私は松島生まれ松島育ちで松島をすごく好きなので、外から寄り添ってくださる方がいるということ自体、すごく嬉しくて。松島は平安の頃から霊場としての歴史があるんですが、雄島はその原点と言われている島なんです。雄島から見ると松島の景色があまりにも綺麗なもので、この世とあの世の境目だということで、多くの人が祈りを捧げたり、家族の成仏を願って遺骨や遺髪を持ってきたり、僧侶の方々が修行をして生活していた場所だったんです。江戸時代に瑞巖寺が伊達政宗公の菩提寺になってそちらが有名になったんですが、実は原点は雄島だということがなかなか皆さんにお伝えできていなくて。

五十嵐 雄島に連れて行ってもらうってその説明を受けて、ああ、かつての人はここに極楽浄土を見たのかと。現代を生きる我々は松島の風景から極楽浄土を見出す力を持ち合わせていないと思うんですが、でも何かきっかけがあったら辿り着いたり、瞬間的には想いを馳せることが出来るんじゃないかと思って、今回、「そらあみ」で極楽浄土をつかまえないと。でも極楽浄土をつかまえるって言っても抽象的すぎるので、もうちょっと具体的なものはないかと考えていた時に、も

なぎ、人の思いが集う瞬間。そういう視点、感覚みたいなものを未来に繋げたかったがために、参道を月のための角度にした。未来を生きる我々が受け取るべきメッセージはそこにあるんじゃないかと思って、今回は極楽浄土をつかまえるお月様をつかまえる「そらあみ」をしてみよう、ということになりました。

谷津 実際に「そらあみ」を展示してみたら、思っていた以上にすごく瑞巖寺の参道の空間に似合いましたよ。

津川 衝撃でしたよ。僕の中では瑞巖寺ではこういうことはできないと思っ

ていて。

五十嵐 僕がいきなり行っても門前払いだと思いますけど、綾さんは、役員職員としてきちんと、文化財や施設のことを分かっている上に「地元の人」という顔があるんです。瑞巖寺の人が昔からのお友達であったりとか、県の担当者の方とか、文化財担当の方もみんな仲間という感じで。

佐藤 ご近所さんであったりとか、子どもの頃からの知り合いとかも多いですからね。そういう意味では、お役に立てることは多いかもしれません。

五十嵐 編んだ場所は松島のヨットハーバーで、雄島の付け根のようなどころなんですけど、向かいにいかぼっば屋さんがあって、かき水の差入れとか、看板をもっとこっちに置いた方がいいとアドバイスしてくれたら、いろいろ応援してもらいました。夏休みだったので、水族館に遊びに来たご家族だったり、ヨットハーバーに来た方たちだったり、関西の方からたまたま旅行に来てた美容師さんだったりとか、通りすがりの人から地元の方まで参加してくれました。

津川 編み方というのは全国共通なんですか？

五十嵐 それが面白くて、世界共通なんです。現存する最古の網は中



石器時代の遺跡から出ているらしいんですが、網というのは植物の繊維を編んで作っていたので形が残りにくくて、遺跡からもなかなか出て来ないらしいんです。が、おそらく海伝いに伝わっていたであろうと。今年の6月にブラジルでも編んで来たんですけど、津川 ブラジルでも！

五十嵐 そう、地球の裏側でもちよつとやってみようと思って。そしてね、ブラジル人漁師も編んでました。同じです。道具も同じ。網針（アバリ）っていう道具を使うんですけど、この網針のデザインも同じなんです。東松島に里浜貝塚っていう約7千年前の遺跡がありまして、瀬戸内海で出会った海洋考古学者の人に聞いたたら、どうやら日本で一番古い網針は里浜から出てるらしいんですよ。その頃からデザインが変わっていない。完成されてるんです。縄文時代の人たちもこれを見たら「ああ、網針だ」って思うわけですよ。

津川 縄文人も「そらあみ」をしてた（笑）

五十嵐 当時は生きるために網を編んでいて、「そらあみ」は違う目的ではあるんですけど、ああやって水際で人が集い、網を編んで、小さい子たちが糸を巻いたり、年配の方が教えに来てくれたりっていう光景は、おそらく縄文時代と相通するものがある。編んだ人だけがわかる、指のちよつと食い込む感じとかも、多分縄文人もわかっている。

津川 そう思うとすごいですね。

谷津 「そらあみ」について説明する時によく話しますが、現代アートのプロジェクトって、やってもなかなか地元の方には関わっていただけないことが多いと思うんですけど、「そらあみ」はやっている地元の方が話しかけてくれるという特徴がある。一緒に作品を作ることできるし、そこからいろいろなお話を聞いて関係性を

作っていくこともできるんですよ。

五十嵐 そうなんです。やっている間にいろんな人との出会いがあって、綾さんに出会い、漁師さんやヨット乗りに出会い。結果、網を編みながら人を編んでいくことになる。最後、出来上がった網を使って月をつかまえようということで、中秋の名月の日にみんなで再会して、松島湾のあなごの白焼きをさっきのいかぼつば屋さんで焼いてもらい、ヨット乗り達はそばが好きなので、そば打ち職人さんに来てもらって手打ちそばを食べて。さらに、去年浦戸諸島で編んだ時に協力してくれた漁師さんが蟹を山ほど持って来てくれて、おいしい日本酒に舌鼓を打ちながらみんなで網越しに月を眺めるっていう、そういうつかまえ方ができたんですよ。それは最初に松島に入ったときに思い描いていたものではなくて、ちよつとずつ話がつながっていった後にあの日が出来上がったんですけど。去年お会いした浦戸の方だったり、塩釜の方も松島に来てくださって、今年新たに出会った松島の方たちもそこにいて、「つながる湾」らしい夜だったなと思います。

「今の価値観」から自由になるきつかけを開く

谷津 綾さんは前年の浦戸諸島の「そらあみ」は実際にご覧になっていたんですか？

佐藤 残念ながら見ていなくて、「つながる湾」のパンフレットで知ったんです。「そらあみ」もそうですし、「つながる湾プロジェクト」の、行政のボーダーを越えて湾でつながるというコンセプトが、もう私にとって心をつつものだったんです。

谷津 じゃあもう、待っていましたという。

佐藤 本当に待っていましたという感じですね。震災の次の日に仕事

で湾岸エリアを歩いたんですが、そのときに、松島湾がものすごく綺麗だったんです。これくらいの被害で松島湾が守られていることにはやっぱり意味がある。湾の向こう側の浦戸の被害はひどかったわけで、島々が緩衝材になってくれたから私たちは助けられたというところがあった。そういうことを考えると、やはり松島湾は私たち松島町だけではなく多くの人が共有していて、そこにはいろんな暮らしがあるということも私も再認識して。湾を深く知ってみんなで共有するための何かをしていかないといけないんじゃないかと感じた震災後の数年だったので、このプロジェクト自体が自身のやっていきたいこととすごく合致していたんです。

津川 もともと「湾」で考える発想をお持ちだったということですよ。ね。「つながる」というのは単純な言葉なのでいろいろな解釈の仕方があると思うんですけど、「僕とあなた」とか、「塩釜と松島」とかの二点間というのがすごく重要で、合併しようっていうことじゃなく、それぞれの立ち位置、地域文化をお互いに知って、認め合った上で同じ方向を向く。一緒にプロジェクトをやれば利益が出るとかそんな話ではなくて、一番大事なのは、お互いを知ることと自分をより知ることができるといことなんです。それが僕の思う「つながる」です。

五十嵐 ここに来る前は熊本の不知火湾にいたんですが、そこで面白い話を聞いて。今の行政区画というのは廃藩置県の時にできたわけですよ。今も「群」という住所が残ってますけど、あの「群」というのは廃藩置県以前からある地域の区分で、川の流れとか水の動きをグループ化したものらしくて。水の動きというのはつながりであると同時に、隔たりでもあるわけですよ。その後、今の行政区画に切り替わっていく中で、道路や線路を作った。水のつながりによってグループングされていたものに対して、新しく経済状況を生み出すためのグ

ルーピングをし直し、水の代わりに電車であったり道路を通したと。今、湾という水の流れをベースに、行政区画を越えてアクションを起こしていこうという動きがあるのは、何か時代がそうさせていると言うか、資本主義の行き詰まりみたいなことだったり、さまざまな閉塞感みたいなものだったり、未来をどう見出しているのかが問われていく時に、自分たちの中にDNAとして刻まれている「水の記憶」みたいなものが自由になることを求めているんじゃないかとちょっと思ったりして。我々の身体は7割くらい水でできてるらしいですし。

津川 陸ではない交通ということ言うと、この地域には昔「三陸汽船」というのがあって塩釜と釜石を結んでいたんですけど、そういう海を中心にした文化を知るとはつと気づく部分があるというか、現代とは見方、ものさしが違いますよね。

五十嵐 今日のイベントに「海辺の記憶をたどる旅」という名前がついてますけど、網もそうだし、船を漕ぐこともそうだし、水に関わる行動をすることで、自分の中にある水の記憶を開くみたいな。昔の人がやってたことをそのまま現代で使うということではないし、過去の歴史を読み解くとか、昔はよかったよねということでもなく、でも僕らは何か、今の価値観から自由になりたくて、そこを開きかけがあるんじゃないかなって思う。今の時代だからこそ、水とどうつきあっていくかを考えながら、内側にあるものにもつと目を向けなければならぬんじゃないかなと。

谷津 「海辺の記憶をたどる旅」というのは、去年、このプロジェクト全体を説明したパンフレットをつくる時に、報告書みたいな名前にするのは嫌だねと話合って、出て来た言葉なんですよね。やっぱりこのプロジェクトは、今言ったような表に出て来ない記憶、自分たち

在も大きいんですよ。多賀城に国府があったからこそ鹽竈神社があり、松島に瑞巖寺前史の松島寺ができたわけなので。

津川 多賀城は当時の日本では外に対する防御の拠点だったので、この辺りの中心だったんですよ。時代とともに軍事的な役割が薄れて、衰退してしまっただけなんです。

佐藤 「宮城」という地名は、多賀城があったことからきているので、多賀城は宮城の原点なんです。

谷津 たどっていくと全てに理由があるんですよ。もとは里浜に何千年も縄文人が定住していた、人が住み続けてきた土地だという下地があって、だからこそ塩が作られていて、だからこそ多賀城がここに来たんだと、私もこのプロジェクトを通じて学びました。

津川 そういったことを考えると、歴史と今の両方を汲み取って「湾」

の遺伝子の中に知らない間に引き継がれているものを感じるとか、そういうものを探す作業をしているのかなと思います。

五十嵐 伊達政宗も海が好きだったんだなって思うとなんかちょっと嬉しくなるとか、政宗公もここから月を見ていたんだ、という風に視線を重ね合わせられる楽しさというのはありますよね。

佐藤 松島湾の形はその時とほぼ変わっていないので、本当に政宗公と同じ景色が見れちゃう。それだけでも「松島湾ですごい」って思ってます。

谷津 松島湾には大きな河川が流れ込んでいないので、土砂が堆積せず、縄文時代からずっと同じ地形だと。なので、今現在私たちが見ている風景を縄文人も見えていたし、縄文人も同じように松島湾の魚を食べていたし、同じように網を編んでいたことなんですよ。

五十嵐 やってることは一緒だということ。

佐藤 今も変わらずにやっています。

谷津 地域資源を生かす取り組みって、今あちこちで盛んにやられていますけど、観光資源にするためにやるパターンがほとんどですよ。私たちのような考えで地域を知ろうとする行為というのは、津川さんが「自分を知ることが一番大事」とおっしゃっていたように、ある意味自分のためにやっている面があります。

津川 一回来れば終わりの「観光松島」ではなくて、何回も来て欲しいだとか、もっと言えば住んで欲しいという気持ちがある。「霊場松島」という言葉に現れるのかなと思ってるんですけど、観光をやるにしても、来てもらう人以前に住んでる人が自分の土地の文化を知った上で迎え入れられたらいいし、来る人も、地元の人と同じ目線で観光してもいいのかなと思います。

佐藤 本当にそう思います。また、松島を伝えるためには多賀城の存

という発想のもとに連携していくのは正解じゃないかなと思います。

佐藤 地域の人々がそれを再認識すると、生まれてくるもの、出来上がるものも変わってくる気がします。

五十嵐 面白がる仲間を増やすのも大事ですよ。こういうアクションとか考えとかを一緒に面白がる、湾を楽しめる仲間が増えていくのが大事だと思います。それが一番のエネルギーというか、原動力になっていくんじゃないかと思えます。



佐藤 綾 (松島町役場産業観光課観光班長)

松島町の国宝瑞巖寺の参道のすぐそばで生まれ育つ。職業として観光振興に取り組むと共に、生まれ育った素敵な町の魅力を多くの人に伝えることをライフワークとして活動中。好きな言葉は「袖振り合うも多生の縁」。

## 五十嵐 靖晃 (アーティスト)

東京藝術大学大学院修了。土地に住み、そこで出会う人と共に、普段の生活に新たな視点と人の繋がりを生み出す試みを行う。代表作は、福岡県太宰府天満宮との協働プロジェクト「くすかき」、住民たちとともに新たな風景をつくり上げる「いるほし」「さらあみ」など。

## 津川 登昭

(一般社団法人チガウラカセコミュニティ理事長)  
塩釜市生まれ、多賀城市在住。仙台の広告制作会社へ所属しながらチガカセを主宰。湾地域の兄弟性を感じ、地域の自慢観光や自慢教育の拠点としての「湾の駅」構想を提唱している。

## 谷津 智里 (Circuit)

東京都出身、白石市在住。2011年、Art Support TOHOKU-TOKYO (東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業) のスタッフとなる。2013年より同事業コーディネーターとして、塩釜のメンバーとともにつながる湾プロジェクトを作り上げてきた。

## つながる湾プロジェクト 全記録

[2013]

- 5月26日  
場所：塩釜市浦戸諸島 4島  
Welcome!! TANEFUNe @塩竈浦戸のりフェスティバル
- 5月26日  
場所：ビルドスペース（塩釜市港町）  
つながる湾プロジェクトキックオフミーティング
- 6月10日  
場所：五十嵐邸（塩釜市玉川）  
第1回 チーム wan の会
- 6月16日  
場所：塩釜市浦戸諸島寒風沢島  
寒風沢島田植イベントに TANEFUNe が参加
- 6月20日  
場所：五十嵐邸（塩釜市玉川）  
第2回 チーム wan の会
- 6月23日  
場所：くろしおマリーナ（塩釜市北浜）  
TANEFUNe デッキリベアワークショップ
- 6月27日  
場所：ビルドスペース（塩釜市港町）  
第1回 チーム wan 勉強会
- 6月29日・30日  
場所：マリンゲート塩釜  
TANEFUNe 乗船体験  
@マリンゲート塩竈リニューアール一周年祭
- 7月4日  
場所：五十嵐邸（塩釜市玉川）  
第3回チーム wan の会

[2014]

- 1月13日  
場所：ビルドスペース（塩釜市港町）  
語り継ぎのためのワークショップ  
「海よりも風よりも」歌い継ぎ ～青谷明日香編～
- 2月6日  
場所：ビルドスペース（塩釜市港町）  
第9回 チーム wan 勉強会
- 2月23日  
場所：ビルドスペース（塩釜市港町）  
語り継ぎのためのワークショップ  
「海よりも風よりも」歌い継ぎ  
～アサノタケフミ、asari 編～
- 5月19日  
場所：ビルドスペース（塩釜市港町）  
第10回 チーム wan 勉強会
- 7月13日  
場所：オ フルニル デュ ボワ 釣取本店（仙台市）  
語り継ぎのためのワークショップ  
漂流民たちが初めて食べたパンづくり  
～オ フルニル デュ ボワ編～
- 7月18日～9月28日  
場所：うらとラウンジ“ 菜の花”  
（塩釜市浦戸諸島野々島）  
喜多直人 写真展 [同居湾～2013 浦戸諸島～]
- 7月4日～6日  
場所：釜ヶ淵、御釜神社（塩釜市）  
TANEFUNe が御釜神社葦焼焼神事を取材
- 7月11日  
場所：五十嵐邸（塩釜市玉川）  
第2回 チーム wan 勉強会
- 7月21日  
場所：塩釜市浦戸諸島  
TANEFUNe 乗船体験
- @アマモ再生企画 in 浦戸諸島
- 7月25日  
場所：ビルドスペース（塩釜市港町）  
第3回 チーム wan 勉強会
- 8月1日～31日  
場所：塩釜市浦戸諸島 4島  
TANEFUNe カフェ in 浦戸諸島
- 8月8日  
場所：ビルドスペース（塩釜市港町）  
第4回 チーム wan 勉強会
- 8月10日～31日  
場所：塩釜市浦戸諸島 4島  
そらあみ ― 浦戸諸島 ―
- 8月22日  
場所：ビルドスペース（塩釜市港町）  
第5回 チーム wan 勉強会
- 8月29日  
場所：ビルドスペース（塩釜市港町）  
第6回 チーム wan 勉強会

- 9月1日～8日  
場所：塩釜市浦戸諸島桂島  
そらあみ展示 in 桂島
- 9月9日～15日  
場所：塩釜市浦戸諸島朴島  
そらあみ展示 in 朴島
- 9月11日  
場所：南三陸町本浜町  
TANEFUNe in 南三陸
- 11月12日  
場所：ビルドスペース（塩釜市港町）  
第7回 チーム wan 勉強会
- 12月3日  
場所：ビルドスペース（塩釜市港町）  
第8回 チーム wan 勉強会
- 12月7日～8日  
場所：7日/ふれあいエスプ塩竈  
8日/民宿外川屋  
（塩釜市浦戸諸島寒風沢島）  
つながる湾フォーラム ～海・種・記憶～

つながる湾プロジェクト ドキュメントブック

## 海辺の記憶をたどる旅 [2013 ― 2014]

2015年3月

編集

高田彩 谷津智里

デザイン

篠塚慶介

印刷

今野印刷株式会社

写真

シェランガスキーひかり 大沼剛宏 喜多直人

イラスト

本田千華（P14-15, P20-21, P26-27, P36-37）

利光春華（P30-31, P32-33）

協力 塩竈市

発行 ビルドフルーガス＋一般社団法人チガノウラカゼコミュニティ、  
えぞこ芸術のまち創造実行委員会、東京都、  
東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）

- 12月20日  
場所：宮城県漁業協同組合塩竈浦戸東部支所  
（塩釜市浦戸諸島寒風沢島）  
浦戸食堂 まりこさんのカレーとその記憶
- 12月21日  
場所：塩竈市公民館本町分室 大講堂  
（塩釜市本町）  
海辺の記憶をたどる旅展
- 12月21日  
場所：塩竈市公民館本町分室 大講堂  
（塩釜市本町）  
語り継ぎのためのワークショップ  
ロシア皇帝・アレクサンドル一世が身につけていた煎草づくり～ wool.cube.wool! 編～

運営 つながる湾プロジェクト運営委員会

共催 塩竈市

Printed in Japan.

Copyright©2014 TUNAGARU WAN PROJECT. All rights reserved. 本誌掲載の記事、写真、イラストレーションの 無断転用を禁じます。  
本事業は Art Support Tohoku-Tokyo（東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業）です。

あとがき

2013年5月、この湾へやってきた TANEFUNe は、まるで図らずも海流に乗ってこの地に辿り着いた漂流船のようだった。初めは、非日常の連続である被災地に正体不明の船が漂着したことに戸惑った。

「この船は何をしに来たのか。」

疑問はやがて新たな課題へと変換され、TANEFUNe は「この地域の物語や記憶を積み込むうつわ」として、私たちとこの地域を否応なく向き合わせた。

チーム wan 勉強会で「三陸汽船」を題材にした際、明治40年代、三陸沿岸を民間事業による汽船が運航し、荷物や旅客を運んでいたことを知った。実は高田家もその頃、岩手から移住している。地域の文脈から、自分の家系がいつ、いかにしてこの地域に辿りついたのかを知り、この土地の歩みを自分事として捉えるきっかけになった。活動に取り組む中でそうした気づきを何度か経験するうち、不安はいつしか好奇心へと変わっていった。

今では、2013年5月に蒔かれた種は様々な芽を出し、この地域に根付いている。

宮戸島から湾を一望する私たちの眼差しには、松島湾の特殊な地形にひそむ眩しい文化資源が映る。塩をひとつち舐めれば、湾域の歩みと繋がりを感ずることが出来る。この湾で育まれてきた暮らしや文化が、一人一人の感覚に、誇りとなって浸透はじめている。

今を生きるからこそ、消えゆく日常を記録し、海辺の記憶をたどっていきたい。漂いながらも、この旅は続くだろう。

最後に、日比野克彦さん、舞鶴「TANEFUNe」チームの皆さん、五十嵐靖晃さん、増田拓史さん、そしてこのプロジェクトに参加いただきました全ての皆様へ心より感謝申し上げます。

つながる湾プロジェクト運営委員会  
ビルド・フルーガス代表

高田彩

改  
新

